

『救われる前の人生』

'22/09/25

聖書箇所: エペソ人への手紙 4 章 17-19 節 (新約 p.378)

皆さんは、この聖書のみことばが教えてくれているような信仰をお持ちでしょうか?…もしお持ちなら、その信仰を持つ前のご自分について、どう思われます?…その頃は楽しかったですか?もう1度、その頃の人生に戻りたいですか?

命題: 救われる前の私たちの人生は、どのようなものだったでしょう?

実は、今日のみことばは、私たちが信仰を持って救われる前の状態について教えてくれています。果たして、救われる前の私たちは、神様の目から見た時、どのように映っていたのでしょうか? 今日のみことばは、そういったことについて教えてくれています。…願わくは、今日のみことばを学ぶことによって、自分たちが救われる前の状態について、聖書的な価値観を持つことができ、こうして、信仰を持って救われたことを、心から感謝することができて、ますます、神様に感謝し、神様の栄光のために生きていくことができることを期待いたします。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今日のみことばである、エペソ 4:17-19 をお開きください。

I・意味の無い、無駄な歩みをしていた!(17節)

このみことばは、まず、1番に、**真の神様を信じる前の私たちの歩みは意味の無いような…、全く“無駄”なものであったと教えます。**一体、どうしてなのでしょう? 17節には、こうあります。

17 **そこで私は、主にあって言明し、おごそかに勧めます。もはや、異邦人がむなししい心で歩んでいるように歩んではなりません。**

●パウロの教え? それとも、神様の みことば ?

まず最初に、皆さんに説明しておきたいのは、**未信…、つまり、私たちが救われる以前は、この地上にあって全く役に立っていなかったとか、何の喜びや満足も無かったというようなことを言っているのでは決してありません!** 聖書の教える真の神様を信じていない時でも、皆さんは精一杯生きて…、自分の人生を謳歌し、また、社会に貢献しておられたことと思います。単なる快楽や、欲望を満たされたことから来る満足などではなく、本当に素晴らしい貢献のゆえに、充実感や達成感などを経験しておられた方も、たくさんおられることでしょう。聖書は、そういったことをすべて否定するものでは決してありません。

しかし、今日のみことばを真摯に…また、神様の前にへりくだって聞いてくださったなら、**聖書のみことばが** どういったことに関心を持ち、どういったことに焦点を絞っているのか、ということ、を、きっと皆さんも理解していただけるように思います。

このみことばでまず、パウロは、**『そこで私は、主にあって言明し、おごそかに勧めます。』**と話してくれています。ここに至るみことばまで、パウロは、「教会」という言葉こそ出さなかったが、明らかに、そこで語られてあったイメージは、「教会」でした。…と言いますのも、例えば、**3節の、『御霊の一致を熱心に保ちなさい!』**という命令にしても…、**じゃあ、実際問題として、どこで一致を保つのでしょうか? その対象は、どこからどこまでなのでしょう? ⇒明らかに、教会ですよ?…また、11節の、『こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。』**という教えにしても、主は、**教会に牧師を与えてくださったのです!** 牧師あってこそその教会ではありません! 教会があってこそ、牧師なのです! そうでしょ! …そうして、**12節の、『それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるため…』**とありますが、ここで言われている、『キリストのからだ』とは、救われた個人個人のことでなく、明らかに教会のことでしょう! もし、ここで言われている、

『キリストのからだ』というものが、救われた個人個人を指すのなら、**12節の、『聖徒たちを…』**という表現に合わせて、こういった単語も必ず複数形が使われなくともおかしいのですが、**12節の『キリストのからだ』も、13節の『おとな』**という単語も…、**16節の『からだ全体』**という単語も、すべて複数形が使われていることから…、これらは皆、クリスチャンの集まりである、教会について語られてある!ということが分かるのです。

その後、パウロは、**ここ17節から、今度、具体的な適用を個人個人に対して話し出していくわけですが、** 実際的な内容や指示に関しては、もう少し後の25節以降ですが、その前にもう1度、クリスチャンたちの信仰にむち打って、各個人に対する実践(=生きた証し)を呼びかけようとしているのです。だから、**ここ17節の書き出しには、『そこで…』**という言葉があるのです。

その次に続く、『私は、主にあって言明し、おごそかに勧めます。…』という言い回しですが、聖書でこういった言い回しがされている場合の『主』とは、イエス・キリストを指します。でも、それだけではなく、イエス様こそが真唯一の神様…、すなわち、万物すべての創造主であられ、また、それ故に主権者であられるということも意味しています。…ですから、例えば、**ローマ 10:9 のみことばも、『なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。』**と教えますし、また、**1コリント 12:3 のみことばも、『…聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です。」と言うことはできません。』**とあって、イエス・キリストだけが唯一の主であられる、ということを繰り返して、みことばは教えてくれています。イエス様こそは、正真正銘、私たちの主なる御方なのです!

それと、パウロが今日のみことばで、「今、ここで私パウロが話していることは、私個人の意見や願いではなくて、唯一真の神であられ、私たちの主人であられるイエス様の思いなのである!」ということ、パウロは訴えているのです!…ですから、その後、**『おごそかに勧めます。』**という言葉(μαρτυρομαι)も、これは、「証人、証言する」という言葉(μαρτυρος)の派生語で、パウロは、神であるイエス・キリストの代弁者として語っている、ということなのです。実は、この「証人、証言する」というギリシア語は、「殉教者」という言葉の語源にもなったような言葉で、パウロたち聖書の著者たちは、それこそ…、自分のいのちを懸けて、神様のお言葉を書き記し、また、神様のみこころを伝えようとしたのです。

このように、聖書のみことばは、パウロたち…、人間の意志、人間の言葉によって書き記されたものではありません! ちょうど、**Ⅱペテロ1章のみことばが、『20 それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。21 なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。』(Ⅱペテロ 1:20-21)**と教えてくれています。このように、聖書のみことばはすべて、神様の息吹(Ⅱテモテ 3:16)、神様のお言葉によるものです!

現代、実は、多くのクリスチャンたちは、こう教わっています。「今、私たちが持っている聖書66巻のみことばは、4世紀頃(つまり、キリスト教が公認されて以降)になって、当時の教会会議が、これは、神様が書き送ってくださった聖書のみことば(=正典)であるが、しかし、これは神様のみことばとは言えない(つまり、正典ではない)という線引きをした」って…。つまり、神様のお言葉と、そうではない…、当時の人間たちが聖書のみことばを真似て、書き記したものが非常に見極めが難しく、その違いが教会会議を開いて、皆で相談しないといけないほど、その線引きが困難なものであったって…。しかし、聖書のみことばを見た時、明らかに、それとは違った印象が伝わってきます。

ですから、どうぞ、**Ⅱペテロ 3章のみことばをご覧ください。Ⅱペテロ 3:15-16、『15 また、私たちの主の忍耐は救いであると考えなさい。それは、私たちの愛する兄弟パウロも、その与えられた知恵に従って、あなたがたに書き送ったとおりです。16 その中で、ほかのすべての手紙でもそうなのですが、このことにつ**

て語っています。その手紙の中には理解しにくいところもあります。無知な、心の定まらない人たちは、聖書の他の個所の場合もそうするのですが、それらの手紙を曲解し、自分自身に滅びを招いています。』

⇒皆さん、聞いてくださいました？ここで、ペテロは、パウロが書いた手紙を指して、その手紙には、理解しにくいところもあるけれども、でも、無知な者たちが、それらの手紙を曲解(つまり、いい加減に理解)して、自分自身に滅びを招いている！ということを警告してくれています。…つまり、あの使徒ペテロは、パウロの手紙が、真理について語ってくれている…、つまり、神様のみことばであったという理解・認識を持っていたのです！…このように、当時、ほとんどの聖書の書物は、初めから、それを受け取った者たちが、「これは、神様の書物である！神様からのみことばである！」という認識を持っていたのです！…だから、1-3 世紀の初代教会のメンバーたちは、そのみことばによって励まされ、あのローマの迫害にも屈することが無かったのです。だから、私たちも、現代にあって、この聖書のみことばに対して、正しい信仰 & 強い確信を持つことが必要です！「この聖書以外に、神様からのお言葉も、私たちが一番に信頼すべき教えも無い」って…。どうか、皆さんも、そういった理解に立っていただきたいと思います。

●神様をご覧になる、価値の有る無し？

そして、聖書のみことばは、基本的に、「すべてを造られた真唯一の神様からの視点によって書かれています。そのような神様からの視点…、つまり、神の目から見た時、その神様を知らないで生きていくということは、『むなしい心で歩んでいる…』、つまり、むなしい人生を生きてしまっていると、みことばは教えるのです。実は、ここで言われている、『むなしい』(ματαιότης)という言葉は、「空虚、内容が無い、現実でない、無益、愚か…」というような意味で、当然、この言葉は…、今先程言ったように、神様からの視点によるものです。

じゃあ、一体どうして、神様を信じないで生きている人の人生が、『むなしい』、無益、内容が無いのでしょうか？例えば、詩篇 19 篇のみことばは、こんな風に教えます。『1 天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。2 昼は昼へ、話を伝え、夜は夜へ、知識を示す。3 話もなく、ことばもなく、その声も聞かれない。4 しかし、その呼び声は全地に響き渡り、そのことばは、地の果てまで届いた。神はそこに、太陽のために、幕屋を設けられた。』(詩篇 19:1-4) ⇒確かに、このみことばが教えてくれるように、神によって造られた被造物たちは、私たちが話すような言葉を口にしません。でも、彼らの声なき叫び声…、声なきメッセージは、世界の至る所で、自分たちのことを造ってくださった神様のことを伝え、その神様の偉大さをほめたたえているのです！…このように、真の神様は、御自身の栄光のために、太陽や月、また、この地球とそこに住むすべての生き物たちを造られたのです。…すべてのものは、ただ、何となく…、理由も目的も無く存在しているわけではありません！

ですから、どれほど、私たち人間が、この地上で多くの財産を築こうと…、また、多くの功績を残そうとも、もし、私たちが造って、いのちを与えてくださった造り主なる真の神様を知らずに…、本当の人生の目的を知らずに生きていくのなら、それは、神様の前には、全くむなしい！無益なものであり、「愚か」と称されてしまうのです。

だから、例えば、ルカ 12 章に、そういったことを話してくださったイエス様の例え話があります。どうぞ、ルカ 12:15-21 をご覧ください。『15 そして人々に言われた。「どんな食欲にも注意して、よく警戒しなさい。なぜなら、いくら豊かな人でも、その人のいのちは財産にあるのではないからです。」16 それから人々にたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作であった。17 そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』18 そして言った。『こうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。19 そして、自分のたましいにこう言う。『たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。』20 しか

し神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』21 自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。』

⇒ここでイエス様が紹介してくださった人物は、一般的に言えば、まあまあ「成功者」です。だって、この人物は、勤勉で、ギャンブルをすることもなく、たくさん財産を貯えることができたからです。しかし、そんな人物であっても、神の目から見た時、「愚か者」と言われてしまうのです。…このように、私たち人間にとって一番大切なものは財産などではありません！そんなものは、一瞬にして消えてしまうこともあるし…、その財産が、私たち人間の価値や、その行く先を決めるわけでもないからです。…大事なことは、私たちの魂です！その魂が、どこに向かっているか、です。…もし、私たちの魂が今もまだ、罪の裁きである永遠の滅びに向かっているのなら、私たちのすべきことは、たくさん財産を築くことではありません！まずは、その魂の行く先を変えることが必要なのではないのでしょうか？

マタイ 16:26 で、イエス様は、『人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありません。そのいのちを買い戻すには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。』と教えてくださいました。私たちが、何よりも優先すべきなのは、『まことのいのち』であり、真実の正しい教え…、真理なのです！

どうか、皆さん、思い出してみてください。イエス様が、ルカ 15 章で話してくださった、あの放蕩息子の例えで、真の神様のことを表わしている父親は、自分勝手なことを言って、放蕩していた弟息子が戻ってきた時、何と言っていました？⇒ルカ 15:24、『この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかった…』そう、父親は言ったのです！

実際に、この弟息子は死んでいました？いいえ！違いますでしょ？…この弟息子は、身勝手なことを言って、自分の意志で、父親の元から出ていきました。…言わば、自分の思い通りに生きていたのです。しかし、それは、父親の目から見た時、「死んでいる」と同然でした。…と言いますのは、その弟息子は、父親の気持ちを全く理解することなく、父親の目から見て価値ある人生を送れていなかったからです。…それは、多分、家出をしなかった兄息子もまた、同様でした。二人とも、父親である神様のみこころを理解できていなかったのです。だから、パリサイ人たちや律法学者たちもまた、ある程度、律法の教えや戒めは守れていたでしょうが、彼らにも、教える価値は無かったのです。

II・心が **かたくな** になってしまっていた！(18 節)

どうぞ、続いて、今日のみことばである 18 節をご覧ください。かつての私たちの歩みとして…、**2 番目に、今日のみことばが教えてくれているのは、私たちの心が頑なになってしまっていた！**ということです。

18 彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。

●人が救われない理由とは？

このみことばに関しては、これまでに何度かお話ししたことがあります。…私たち人間は、傲慢にも、真の造り主なる神様のことをよく知らないのに、自分たちは賢いと考えてしまいます。…だから、ローマ 1:20-23 をご覧いただくと、こう教えるのです。『20 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。21 というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。22 彼らは、自分では

知者であると言いながら、愚かな者となり、23 不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうものかたちに似た物と代えてしまいました。』⇒神様の存在や、その神様が御持ちの偉大なる御力などは、私たちの周りにある…、神様が御造りになられた被造物を見れば、一目瞭然です！なのに、私たち人間は、勝手に石や木などで作った神様を拜んで、好き勝手に生きている、とみことばは非難しています…。ホント、その通りじゃありません？

実は、今日のみことばの18節は、非常に興味深いことを教えてくれています。…それは、私たち人間が、『神のいのちから遠く離れて』いる…、つまり、なかなか救われ得ないのは、主に、2つの理由のゆえだと言うのです。それらは、①『彼らのうちにある無知』と、②『かたくなな心とのゆえ』であるということです。

このみことばは、はっきりと教えてくれています、「人が救われたいのは、神がその人を救ってくださらないからじゃない！その人自身が救いを拒んでいるからだ！」って…。2つめの、『かたくなな心』…これはすぐに分かりますよね。その人自身が聞こうとしない…、受け入れようとしない、ということです。いろんなことに耳を貸さなかった…、神様に心を開こうとしない…、益々、その方の心が…、まるで踏み固められた地面のように…、堅く、何者も受け入れられないようになってしまっているのです。

それと、もう1つの理由は、彼らが『無知』であるからです。でも、ある方は、こう言われるかも知れませんが、「知識に関しては、どうしようもない…。だって、その人は、知らなかったのだから…。」⇒しかし、ここで、『無知』と訳されてあるギリシャ語は、「怠慢」とも訳せる言葉なのです。日本語でもそうですが、私たち…、ただ単に、知識の無い人のことを、むやみに「無知だ」とは言いませんでしょ？私たちが「無知だ」という場合、そこにはある種の、軽蔑と言うか…、あざけりの意味が含まれているのは、「その人が最低限の努力さえ惜しまずにいたら、知ることができたのに、それをしなかったから、その程度の知識さえ無いのだ」というような意味が含まれているからなのです…。

だって、神様は御自身を明らかにしておられるからです！この自然界を見れば、誰かが…、偉大なる御方がこの地球を含む宇宙を造ってくださったことは明らかです！造り主なる神様が居ないで、どうやって、こんなに素晴らしいものがたくさん存在しているのでしょうか？有り得ないじゃないですか！

また、一体どうして、(聖書を持ち上げて)この聖書のような書物が存在しているのでしょうか？これは、決して、私たち人間の知恵や何かの思惑で書かれたものではありません！人間以上に知恵ある何者かによって書き記されたことは明白です。真の神様以外に、一体誰が、こんなに不思議なみことばを書き残すことができるのでしょうか？この聖書のみことばは、今から2000年も前に書かれた言葉なのに、現代の私たちにたくさんのお話を教え、また、感動を与えてくれます。…また、ある時には非常に共感を覚え…、ある時には、鋭く心をえぐります。…一体、どうしてなのでしょう？私たちが御造りになられた神様が御書きになっているから、そんなことができるのです！神様が、すべてのことを御存知だから、そういったことが御出来るようになるのです！

● 神の 嘆き とは？

どうぞ、皆さん。ルカ 19:41-44 をご覧くださいませ？『41 エルサレムに近くなったころ、都を見られたイエスは、その都のために泣いて、42 言われた。「おまえも、もし、この日のうちに、平和のこを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。43 やがておまえの敵が、おまえに対して壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、44 しておまえとその中の子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。』

⇒これは、所謂、「エルサレム入城」と呼ばれる記事で、この後、いよいよ、イエス様が十字架に磔になられるわけですが、この時、イエス様は、あのエルサレムの町を遠目にご覧になって、涙されたのです…。マルコ 13 章などを見ると、イエス様の弟子たちは、その建物の大きさや荘厳さに驚きや感動したので

すが…、でも、イエス様は、それと同じようなものをご覧になられても、その反応は全く正反対でした。それは、イエス様が、物事のうべだけをご覧になられたのではなく、その本質…、その行く末をご覧になっておられたからです。…確かに、この当時、エルサレムの町や神殿は立派でした。過越の祭りの時には、100万人とも言われる人たちが大勢集まって来ていたそうです…。しかし、その中身は？と言うと…、大勢の人々は、約束のメシアが来たのに、それを受け入れない…、信じようとしないで、自分勝手な道を歩んでしまっていたのです。

そういったことに対して、神様は裁きを下されたのです。…それは、まずは、その人自身の滅びであり、…それと同時に、紀元 70 年に起こったエルサレムの陥落です。その時から、イスラエルの人たちは、約1900年もの間…、祖国を失い…、至る所で迫害を受けていくのです…。

私たちも同じです。…私たちも、もし、自分の造り主であられる真の神様を拒み、イエス様が、そのいのちと引き換えに用意して下さった救いの方法を拒むなら、そこには、裁きがあるだけです。私たちが自ら犯した罪の罰…、罪の清算を私たちは永遠の地獄でもって、償っていくしかありません…。

III・心が 無感覚 になってしまっていた！（19 節）

そして最後、みことばが、救われる前の…、かつての私たちのことを、どのように教えているのか？⇒それは、私たちの心が無感覚になってしまっていた！ということです。…特に、それは道徳的な分野においてです。一体、どうしたことなのでしょう…。今日のみことばの19節には、こう記されてあります。

19 道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行いをむさぼるようになっていきます。

ここで言われている、『無感覚』という言葉は、書いて字の如く、痛みを感じなくなってしまった状態を指します。しかも、ここ19節のみことばは、『道徳的に…』とあります。また、19節後半を見ますと、性的な意味における罪や傾向に関することも言われています。

私たち人間には善や悪を判断することのできる、「良心」というものが与えられています。どうぞ、ローマ 2:14-15 をご覧ください。『14 — 律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行いをすればいいは、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。15 彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。—』

⇒ここでは、異邦人に関することが教えられているのですが、彼らはユダヤ人とは違い…、神様から律法という、神様の基準…、神の掟というのを知りません…。しかし、彼ら異邦人の心に律法が書かれている！心に刻まれている！というのです。それが良心です。そのように…、神様が、すべての者たちに律法と言うか、善悪を判断するための良心を与えてくださったのです！

確かに、良心は人を救いません。しかし、良心は私たちが罪人であり、救いが必要であることを教えてくれます。…でも、多くの人は、せつかく神様が与えてくださった良心を無視したり、また、変えたりします。「皆がやっているから…、この程度のことです…」と安易に考えてしまって、益々、罪の深みに落ちていくのです。だから、益々、心が無感覚になっていってしまって、良心の痛みというのを感じなくなっていくのです。

おかしなことに、昔、私が2度就職した時…、その両方の上司とも、不倫していました…。ある時、私はその上司から言われました。「お前は、日曜日には毎週教会に行って、博打もしない。酒も飲まない。タバコも吸わないし、コーヒーさえ飲まない…。一体、そんな人生の何が楽しいのか？」って…。まあ、私がコーヒーをあまり飲まないのは、ただ単に嗜好の問題なのですが…(笑)。

皆さんは、こういったことを言われたりしたことはありませんか？…しかし、私が逆に言いたかったのは、「じゃあ、私たちの人生は博打をしたり、酒やタバコのためにあるのですか？不倫をすれば、人生を謳歌していると言えるのですか？」ということです。実際には言えませんでした…(笑)。

皆さんの人生には、果たして、どんな意味があります？私たちの人生は、たかだか 100 年もありません。いつか必ず、私たちは自分の人生の清算を、聖い神様の前にする時が来ます。皆さんは、自分の人生の終わりに、一体何を、あなたを造られた神様の前に差し出すことができるでしょう？

実は、この手紙が送られたエペソやその周辺は、大変、性的な罪が満ち溢れている場所でした…。前にもお話ししたように思いますが、ローマ帝国にある数ある町の中でも、特に栄えていた町であったのです。それは、商業や文化的な意味もありますが、特に、このエペソの町には、ローマ神話で言うところの「ダイアナ」、または、ギリシャ神話では「アルテミス」とも言われる女神が祭られていたのです。この当時、エペソには、古代世界の七不思議にも数えられる、アルテミス神殿というものがいました。建設から完成まで、実に 200 年もかかったとされています。ギリシャにあるパルテノン神殿の、実に 4 倍もの大きさがあったと言われています。

ここでは毎年、祭りが行なわれていました。数千人もの売春婦たちが、その神殿に集まって、神殿売春というようなことが行なわれていたのです。…多くの人が遠くから、参拝や観光、また、欲望を満たすために集まってきました。エペソの町は、そういったことでも栄えていたのです…。

当初、パウロが、このエペソの町に行き、伝道した時、多くの人たちが信仰を持ちました。しかし、そういった神殿関係の仕事で生きていた者たちが大騒動を起こしてしまったということが、使徒 19 章に記されています。

今日の聖書箇所 17 節に、『もはや…』とあるのは、エペソ教会やその周辺のクリスチャンたちも、かつてはそういったことに、少なからず関わっていたからです。だから、パウロは言うのです。「あなたがたも、かつては、そのような者たちでした。しかし、今は、神様によって変えられたでしょ。だから、もはや、そのような生き方に戻ってはならない。過去を振り返ってはならない！」と警告するわけです。

< 励ましの言葉 >

皆さん、クリスチャンの私たちも同じです。今、こうして、偉そうに、「自分は変わった！」と言っている、かつては、真の神様を知らず、自分勝手に、罪深い生活を送っていたのです。ただ神様の御働きによって…、神様の恵みによって救われたに過ぎません。だから、神様に感謝するのです。信仰は、何かの功績ではありませんでしょ？…神様が与えてくださった「救いの方法」、それが信仰なのです…。

例えば、皆さん。…時々、私たちの周りに、残虐な事件が起こりますでしょ。ああいった事件の報道がされると、皆さんは思われませんか？「一体、どうしてそんな凶行に走ってしまったのか？」って…。「理解できない…」と多くの人たちはコメントします。確かに、その通りです。でも、聖書のみことばは、「そういった人たちが異常で…、私たちは健全である」とは教えません。実は、聖い神様の目から見た時、すべての人間が異常なのであり、ある種、まともではないのです…。

例えば、私たちは、人前で裸になると恥ずかしいでしょ？ 恥ずかしくない人なんて居ませんよね？…でも、私たちがすると、そういった当たり前の感情でさえ、実は、罪の結果なのです。だって、聖書のみことばは教えますよね。アダムとエバは、初め、そうじゃなかったって…。

創世記 3:1-7、『1 さて、神である主が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった。蛇は女に言った。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」 2 女は蛇に言った。「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。 3 しかし、園の中央にある

木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけなからだ。』と仰せになりました。」 4 そこで、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。 5 あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」 6 そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。 7 このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。』

⇒この罪を犯す前、アダムとエバは自分たちが裸であったことを知らなかったと言うのです。ま、「知らなかった」と言うより、「意識する必要が無かった」ということでしょうか。…良いでしょうか、皆さん？ 聖書的に見て、罪を知らない…、純粋無垢な人間というべき存在は、人類史上、たった 3 人だけです。皆さんは、それが誰だか分かります？…それは、罪を犯す前のアダムとエバ…、そして、その生涯でたった 1 度も罪を犯すことがなかったイエス・キリストです。

人が何か良いものを持っていると、私たちはごく自然に思ってしまう、「私も欲しい」って…。皆さんもそうでしょ？…でも、そういった思いさえも、実は、神の目から見た時、異常であり、罪なのです。だって、それは十戒の第 10 番目の戒めに背くじゃないですか。『あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。』(出エジプト記 20:17) …このように、私たち人間は驚くほど、私たちが意識できないほど…、罪に染まって、罪に汚れてしまっているのです。

私たちは思います、「人をうらやんだり、ねたんだり、うらやましく思う位、当然だ！」って…。でも、実は、そうじゃないのです！ 私たち人間が罪を犯してしまう前は、そういったことを一切、感じることも無かったのです！

少し表現は変かも知れませんが、私たちは皆、驚くほど、罪人です。私たち人間は、意識せずに…、選択する間もなく罪を犯してしまっています。…だから、私たちには、聖い神様が…、全能者なる神様の助けが必要なのです！…と言いますのも、聖い神様だけが、私たちに真実を教え、本当の希望を与えてくれるからです。ぜひ、この神様だけを信頼し、この神様だけに仕える者となっていきましょう。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。